

Title	特定二者関係の発達における自閉症児の心理・発達の変容 ～関係発達と関係障碍の観点から～
Author(s)	榊原, 久直
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51873
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (榊 原 久 直)	
論文題名	特定二者関係の発達における自閉症児の心理・発達の変容 ～関係発達と関係障害の観点から～ Modification of Autistic Children in the Relationship with Identified Others: From the Perspectives of Development and Disturbance in the Relationship.
論文内容の要旨	
本研究は他者との関係性の中で人間は発達するという“関係発達論”の観点より、自閉症スペクトラム症(ASD)の理解とその援助を“他者との関係性”の視点からとらえ直すことを試みたものである。なかでも特定の他者との共感的な関係性がASD児の多機能の発達を促し、障害特性の軽減につながるとする今日の発達心理学における知見と、今なお問い直しが続いているASD児への臨床心理学的な援助の双方を照らし合わせる中で浮かぶ“Inter-subjectivity”という概念(相互主体性と間主観性)を軸とした援助の“在り方”を検討した。 研究1では、半年間の介入のケース記録や生育歴の分析から、ASDの症状を呈する幼児期にある女児1名とその養育者との関係の歴史を考察し、“関係障害”の形成プロセスの1例を示した。加えて、微視的な分析の中では、主体性の幼い子どもの浮かんでは消えていくおぼろげな感情や意図を間主観的に理解し、やり取りとして繋ぎ合わせていくという関係性の中で、情動コミュニケーションの水準でのコミュニケーションの生起や、「成り込み」や「巻き込み」といった原初的なコミュニケーション現象が生起することが示された。 研究2では、学齢期にあるASD児1名との1年半の関与をエピソード記述の手法により観察記録とし、ASD児から関与者への関わり、関与者からASD児への関わり、ASD児と他児(者)との関係性、ASD児個人の能力や障害特性の、それぞれの変容過程を質的研究により検討した。ASD児から関与者への関わりは、『不特定の第三者』としての関係、『気を許す特定二者』としての関係、『自ら求める特定二者』としての関係、『愛着対象』としての関係、という4つの異なるレベルを移行した。そうした変化を遂げるASD児に寄り添う関与者は、『対象児優先の養護的な関与』を基調とする関わり、『関与者主導のプレイフルな関与』を基調とする関わり、『愛着関係によって促される養育的な関与』を基調とする関わり、という3つの異なる寄り添い方を、力点を変えつつ重層的にとっていた。そしてその両者の寄り添い方の質的变化は、「関係性の同時的・連続的变化」、「関係性の安定的・累積的变化」、「関係性の連鎖的变化」といった相互作用によって共変容を遂げる相互主体的なものであった。そうした両者の関係性の発達においては、相手の行動と不快情動の非随伴性の理解といった他者理解の獲得が先行条件として必要であることや、情緒的な関係性の形成以前には道具的で即時的な関係性の中での快の情動生起が重要になるということが示唆された。 研究3では、幼児期にあるASD児6名との半年間の介入のビデオ分析を行った。その中では、関係性の変容が、相手の道具的な使用度具合の変遷や活動の共有状態、情動共有行動といった観点から示された。加えて、象徴機能やコミュニケーション行動の発達が示された。これは従来の関係発達論的な研究が、関係を扱う一方で、関係性の中での個人の発達を示してこなかったという経緯を踏まえると、関係発達と個体能力発達を繋ぐ重要な結果となったと考えられる。また探索的な分析の中では、情動の生起と発声行動の連関や、そこに間主観的に意図や意味を汲み取ろうとする他者の存在が付随することが、象徴機能の発達につながる事が考察された。 総合考察では、研究1～3を改めて総括し、Inter-subjectivityを基にした理解とそれに応じた関わりが、長期的に見た際に、間主観的な理解の深化、相互主体的な関係性の比率の変化といった変容を遂げるものであることを示した。また相手の“今、ここで”の内的状態を正確に理解するという側面だけでなく、“今、ここから”の主体性の可能性領域を付与することという時に相反する志向性を有することが示唆された。そして最後に、それらの在り方を臨床心理学と発達心理学との接点という形で、他の概念との関連性から検討を行い、発展の可能性を探索した。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (榑 原 久 直)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授 井村 修
	副 査	教 授 金澤忠博
	副 査	教 授 老松克博

論文審査の結果の要旨

本研究は他者との関係性の中で人間は発達するという“関係発達論”の観点より、自閉症スペクトラム症(ASD)の理解とその援助を“他者との関係性”の視点からとらえ直すことを試みたものである。なかでも特定の他者との共感的な関係性がASD児の多機能の発達を促し、障碍特性の軽減につながるとする今日の発達心理学における知見と、今なお問い直しが続いているASD児への臨床心理学的な援助の双方を照らし合わせる中で浮かぶ“Inter-subjectivity”という概念(相互主体性と間主観性)を軸とした援助の“在り方”を検討した。

研究1では、半年間の介入のケース記録や生育歴の分析から、ASDの症状を呈する幼児期にある女児1名とその養育者との関係の歴史を考察し、“関係障碍”の形成プロセスの1例を示した。加えて、微視的な分析の中では、主体性の幼い子どもの浮かんでは消えていくおぼろげな感情や意図を間主観的に理解し、やり取りとして繋ぎ合わせていくという関係性の中で、情動的コミュニケーションの水準でのコミュニケーションの生起や、「成り込み」や「巻き込み」といった原初的なコミュニケーション現象が生起することが示された。

研究2では、学齢期にあるASD児1名との1年半の関与をエピソード記述の手法により観察記録とし、ASD児から関与者への関わり、関与者からASD児への関わり、ASD児と他児(者)との関係性、ASD児個人の能力や障碍特性の、それぞれの変容過程を質的研究により検討した。ASD児から関与者への関わりは、『不特定の第三者』としての関係、『気を許す特定二者』としての関係、『自ら求める特定二者』としての関係、『愛着対象』としての関係、という4つの異なるレベルを移行した。そうした変化を遂げるASD児に寄り添う関与者は、『対象児優先の養護的な関与』を基調とする関わり、『関与者主導のプレイフルな関与』を基調とする関わり、『愛着関係によって促される養育的な関与』を基調とする関わり、という3つの異なる寄り添い方を、力点を変えつつ重層的にとっていた。そしてその両者の寄り添い方の質的变化は、「関係性の同時的・連続的变化」、「関係性の安定的・累積的变化」、「関係性の連鎖的变化」といった相互作用によって共変容を遂げる相互主体的なものであった。そうした両者の関係性の発達においては、相手の行動と不快情動の非随伴性の理解といった他者理解の獲得が先行条件として必要であることや、情緒的な関係性の形成以前には道具的で即時的な関係性の中での快の情動生起が重要になるということが示唆された。

研究3では、幼児期にあるASD児6名との半年間の介入のビデオ分析を行った。その中では、関係性の変容が、相手の道具的な使用度具合の変遷や活動の共有状態、情動共有行動といった観点から示された。加えて、象徴機能やコミュニケーション行動の発達が示された。これは従来の関係発達論的な研究が、関係を扱う一方で、関係性の中での個人の発達を示してこなかったという経緯を踏まえると、関係発達と個体能力発達を繋ぐ重要な結果となったと考えられる。また探索的な分析の中では、情動の生起と発声行動の連関や、そこに間主観的に意図や意味を汲み取ろう

とする他者の存在が付随することが、象徴機能の発達につながることを考察された。

総合考察では、研究1～3を改めて総括し、Inter-subjectivityを基にした理解とそれに応じた関わりが、長期的に見た際に、間主観的な理解の深化、相互主体的な関係性の比率の変化といった変容を遂げるものであることを示した。また相手の“今、ここで”の内的状態を正確に理解するという側面だけでなく、“今、ここから”の主体性の可能性領域を付与することという時に相反する志向性を有することが示唆された。そして最後に、それらの在り方を臨床心理学と発達心理学との接点という形で、他の概念との関連性から検討を行い、発展の可能性を探索した。

本研究は、ASD児へ発達促進的プレイセラピーを実施し、その変化の過程を事例による質的研究、およびビデオ分析による量的研究を行っている。また、結果に関する考察は、発達心理学的観点と心理臨床学的観点から融合的に行われており、この分野における先駆的研究として評価される。